



いじゅきん

(イトヨリダイ属)

～生活史の研究～

① 幻の魚！？ “いじゅきん”

“いじゅきん”は、イトヨリダイ科イトヨリダイ属というグループに属し、沖縄にはモモ、シャム、トンキン、ヒラ、ヒメの5種のイトヨリが生息しています。中城村では、“いじきん”を村魚に指定しており、地域に馴染みのあった魚であったことが伺えます。しかし最近では、もともと個体数の少なかったトンキンイトヨリ、ヒライトヨリ、ヒメイトヨリも含めて、その姿を見ることが難しくなりつつあります。



モモイトヨリ



シャムイトヨリ



トンキンイトヨリ



ヒライトヨリ



ヒメイトヨリ

現在でも、しばしば水揚げあるモモイトヨリとシャムイトヨリは、背鰭を立てた際、鰭膜の切り込みの有無（シャムが深い切り込みあり）で識別することができます。

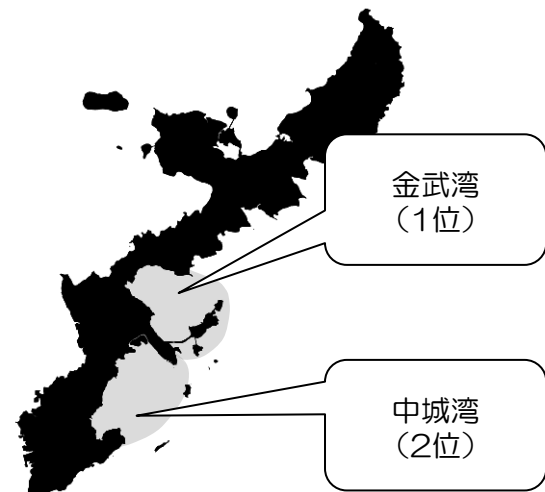
沖縄ではまーす煮、唐揚げ、刺身にして食しており、春先に脂が乗ります。また、軽く塩を振り、昆布〆した刺身は上品な味わいです。

② 内湾域がお好き！？

これまでの市場調査の結果から、モモイトヨリとシャムイトヨリは、水揚げされた個体の95%以上が金武湾と中城湾で確認されました。この内訳をみると、両種ともに金武湾で最も多く出現し、次いで中城湾の順となり、沖縄島の東海岸を中心とした内湾環境を好むことが明らかとなりました。なお、出現頻度は、以下のとおりでした。

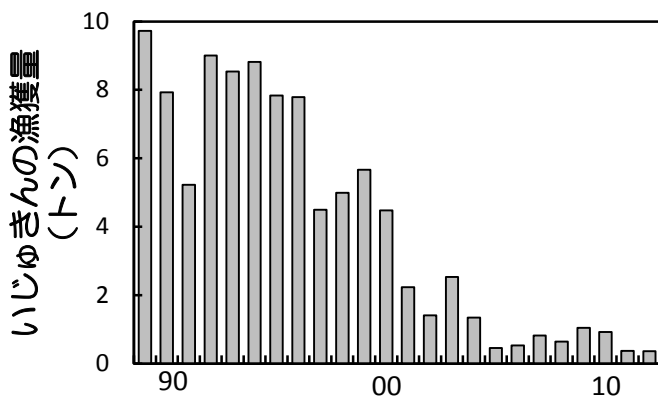
金武湾 モモイトヨリ ≒ シャムイトヨリ

中城湾 モモイトヨリ > シャムイトヨリ



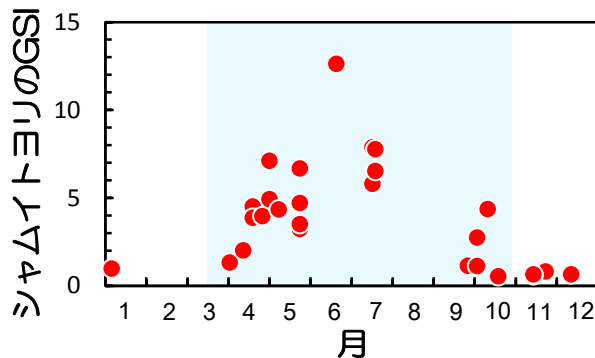
③絶滅寸前！

以前は、中城湾では“いじゅきん刺”と呼ばれる漁具を用いて、多い時で一日に数百キロも漁獲していたそうで、ピーク時には約10トンの水揚げがありました。しかし、漁獲量は減少の一途を辿り、近年は1トン未満で推移している状況です。一方、子ども時代に干潟を一時的に利用するシャムイトヨリが、特に激減している実情をふまえると、埋め立てに伴う干潟の消失など環境改変も大きな原因となっている可能性がありそうです。このように、“いじゅきん”減少は、過度な漁獲や環境の改変が要因であると言えそうです。



④困難な“いじゅきん”の生活史解明

“いじゅきん”の姿をみるのが少なくなった今、一年を通した標本の収集が厳しい状況です。そのため、生活史の解明は困難ですが、ここでは可能な範囲で、モモイトヨリとシャムイトヨリの生活史の一部についてご紹介したいと思います。



産卵期：モモイトヨリとシャムイトヨリについて体重に占める生殖腺重量の割合（GSI）を月別にみると、両種ともに、4～10月に高い値を示す個体が出現しました。生殖腺をより詳しく解析した結果からも、この時期に成熟した個体が確認されました。



モモイトヨリの耳石切片
(輪紋を数えることで年齢がわかる)

寿命と成熟サイズ：モモとシャムの耳石を詳しく調べた結果、成長は雌雄ともに2歳まで早く、以降緩やかとなりました。観察された最高齢は、両種ともに5歳でした。また、推定された産卵期（4～10月）の雌について、体長とGSIの関係をみると、約23cmから高いGSIを示す個体を確認されました。

このように、両種は内湾域で産卵し、約1年で成熟を開始し始め、主に甲殻類を食べながら成長を続け、約5年の一生を全うするようです。将来にわたって“いじゅきん”を利用し続けていくためにも、私たちは本種の生態を理解した上で、節度をもった漁獲と内湾環境の保全に努めていく必要があります。

⑥ 参考資料・文献

- ・上原匡人・岩本健輔・太田 格・海老沢明彦 (2013) 沖縄沿岸域の総合的な利活用推進事業 (内湾性魚類の生態特性の解明)．沖縄県水産海洋研究センター事業報告書, 74 : 11
- ・藍澤正宏・土居内龍 (2013) イトヨリダイ科. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, 東海大学出版会, 946-954, 2011-2013